

自由民権記念館だより

自由のともび

JIYU NO TOMOSHIBI

- 特別展「ブラジル日本移民100周年記念写真展—新世界に渡った日本人—」に向けて
- 平成20年度高知近代史研究会
- 財団法人 板垣会の歴史
- 民権資料を読む会に参加して／読書会の楽しみ

VOL.
63
2008
June

新天地で活躍した土佐の民権家



アマゾン日本殖民の父
崎山 比佐衛



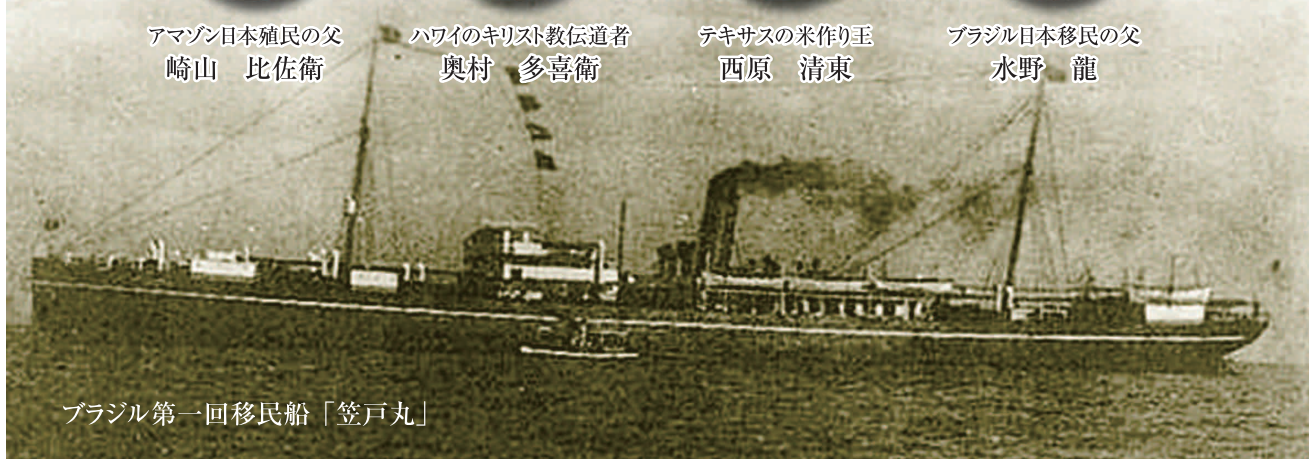
ハワイのキリスト教伝道者
奥村 多喜衛



テキサスの米作り王
西原 清東



ブラジル日本移民の父
水野 龍



ブラジル第一回移民船「笠戸丸」

●リレーエッセイ

歴史意識と残された資料

ある時、ある男が己の伝記を書き残すことを決めた。吾川郡自由党の重鎮でもあった彼は、それによつて幕末から明治の土佐を後世に伝えようと決意したのである。彼すなわち細川義昌は、日記や政治関係の文書はもとより、家族や知人からの書状、名刺やパンフレット、さらには牛乳や帽子の領収書まで、二万点を超える資料を遺した。この資料群は、『細川家資料』として自由民権記念館に収蔵され、一般の閲覧に供されている。私はかつて、数ヶ年をかけてその全てに目を通したことがあるが、彼の「完全保存主義」に驚いたことを覚えている。

この膨大な資料群の背景には、細川義昌の歴史意識が存在する。義昌の死によつて伝記の刊行は実現しなかったが、歴史を後世に伝える基礎資料は遺されたのである。

なぜ資料がそこにあるのか。偶然で残ったもの、隠滅が図られたが断片が残ったもの、そして、細川家資料のごとく意志をもつて残されたもの、種々の場合があるだろう。断片的に遺された資料から歴史像を再現する作業は歴史学の醍醐味ではあるが、歴史を意識した我々は、出来得る限りの資料を残す努力をしなくてはならないと思う。

福田総理は、後世に歴史を伝えるために、行政文書の選択・保存を行う国立公文書館の機能充実を指示した。旧営林署の資料保存も始まり、福岡県では県と市町村共同の公文書館建設が決定された。国も地方も資料保存の重要性を今まで以上に意識し始めている。歴史資料の中でも近・現代資料は、資料の雰囲気や内容が身近かであるためか、廃棄される場合が多い。高知県におけるその収集・保存は、近代史資料館としての意味を併せ持つ自由民権記念館の重要な役割なのかも知れない。

平成二十年度自由民権記念館特別展

「ブラジル日本移民百周年記念写真展」

新世界に渡った日本人

日本人の海外移住の歴史は幕末に海外渡航禁止令を廃止した時に始まり、ハワイや北アメリカなどに渡っていました。いずれも一時的な出稼ぎ移民や新知識習得をめざした書生たちで、海外情報が乏しいために移民会社の搾取も横行していました。

その後、北アメリカでは排日気運が高まり移民が困難となったため、佐川出身の民権家・水野龍はブラジル政府と交渉して、皇国殖民合資会社を起して移民事業に乗り出しました。水野の目指した移民事業はそれまでの出稼ぎ的な移民ではなく、家族を単位とした永住型の移民でした。ブラジルに向けた第一回日本人集団

移住者、七百八十二人を乗せた移民船「笠戸丸」が約二ヶ月におよぶ航海を経て、ブラジルのサントス港に着いたのは明治四十二年（一九〇八）六月十八日です。今年はそれからちょうど百年目にあたります。日本人移民は、当初はコーヒー農園などで慣れない過酷な農作業に従事して苦勞を重ねましたが、辛抱強く経済的、社会的基礎を築いてゆきました。

戦前、戦後を通じての移民の総数は七五万八四六八人で、高知県からの移民者は二万七三二人（約一・五割）と数は多くありませんが、移民事業において土佐人は要所で活躍しています。

まず、衆議院議員を辞職して北アメリカに渡り稲作経営でライスキングの異名をとった西原清東土佐市、ハワイ移民のために伝導を志し高知城そっくりのマキキ聖城基督教教会堂を建て日米融和に努めた奥村多喜衛（田野町）、海外殖民教育会および殖民学校を建て、一家をあげてアマゾンに栽植し信仰に生きた崎

山比佐衛（本山町）、そして前述のブラジル移民の父水野龍等があげられます。今回の写真展では、ブラジル日本移民百年の歴史をJICA（独立行政法人国際協力機構）が集めた貴重な写真四十八点でたどるとともに、自由民権運動終息後に海外殖民に乗り出して大きな役割を果たした土佐の民権家を紹介します。

【展示内容】

記録写真

- ① 新世界へ渡った日本人
- ② 日本から新大陸へ
- ③ 新しい生活を開く
- ④ 新たな進路を求めて
- ⑤ 日伯関係の新しい展開
- ⑥ 農業開発と農業技術革新への貢献
- ⑦ ブラジル近代化への参加
- ⑧ 若い世代はばたく
- ⑨ 日系社会の変動
- ⑩ 文化活動ほか
- ⑪ 新しい世代の発展
- ⑫ 移民たちの使った農具、民具等資料等展示
- ⑬ 新天地で活躍した土佐の民権家たち
- ⑭ 先祖の民権家を語る

他

関連企画

ドキュメンタリー映像作品連続上映会

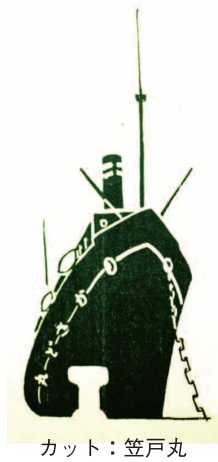
「遙かブラジルの土に生きて」

内容

ブラジルに移住して作品をつくり続ける映像作家、岡村淳氏の「郷愁は夢のなかで」「ブラジルの土に生きて」他六作品を二日間かけて連続上映するとともに、氏の講演「人はなぜ移動するのか」を二十日に行います。

- 期 日 九月 十日（土）・十一日（日）
- 会 場 民権ホール
- 入場料 無料

郷愁は夢のなかで



カット：笠戸丸

高知近代史研究会活動報告

高知近代史研究会は、平成十四年五月十二日に発足し、七年目をむかえました。今年度も第二回目の研究会を五月三十一日に高知女子大学ジョエル・ヨース准教授（ベルギー出身）を講師に迎え「ヨーロッパ近代史におけるベルギー」と題した講演会を開催しました。当日は雨にも関わらず、四十六名の熱心な参加者が集い、盛況でした。

講演に先立ち、会長の高知大学松岡信一教授より「明治初期における西洋への視点」と題する論点の提起の後、ヨース准教授から、「複雑な小国―ベルギー―の魅力などについて講演していただきました。その一部ですが紹介します。

最初に、明治初期の日本の文献でベルギーが登場するものには、『米欧回覧実記』の他に、福沢諭吉の『世界国尽』があり「白耳義（ベルギー）は和蘭（オランダ）より分れたる国なれども、全体の土地柄は和蘭よりもよく、且国民農業に出精して少しも不毛の地なし。鉄、石炭も領分中より出、製造物多し。小国なれども英吉利（イギリス）の風あり。」と記されている。また、植木枝盛も『民権自由論（二編甲）』で「白耳義は欧羅巴（ヨーロッパ）中にて頗る土地の小さき国

にて善良の法を行うに安く、将た最も新に興りたる国故集めて大成することを得たるものにて自由の盛なる處（ところ）と申します」と述べ、ベルギー憲法の数条を挙げ、「人民の権利を確定せる條々多く、孰（いず）れの處にても皆一番に之を大切に致さねばならぬ」と論じている。

ベルギーは、一人当りのGDPは世界で十三位に位置し、文化的にもビールやグルメ、中世ゴシック、バロックの建築様式の宝庫、アール・ヌーヴォーの国であるなど、豊かな小国である。

国内的には、南部と北部の言語紛争が目立つ。戦後はかつて南部（仏語圏）にあった経済の重点が北部（オランダ語圏）に移り、それまで文化的社会的面で南部に引け目を感じていた北部の不満が顕になる。一九六〇年台以降は南と北ではそれぞれ独自のペースで経済と文化が発展していき、憲法の改正などを含め大きな構造改革が成し遂げられてきた。また、地方分権が進み、文化・教育・交通・環境問題などに関する政策が地方へ委譲され、地方レベルで決定、運営されている。その構造は、複雑であるが故に、妥協に妥協を重ね、ここ数年分断・独立の危機を孕みながらも不透明性の上に存続し、社会福祉制度ではそれ

がうまく作用し、雇用保険には期限がないなど充実している。

ベルギー人はベルギー国民であるというアイデンティティへのこだわりは低い、自由に対する願望・執着心といった点では一致している。ブリュッセルの町の象徴、つまり自由の象徴は、民衆を率いる女神ではなく、「小便小僧」であり、脇坂紀行の言葉を借りて表現するなら、「帝国を拒否」する町である。コンゴはかつてベルギーの植民地でしたが、国民の間では「小国には不要、貿易上不利ではないか」など、批判的な声もあつた。コンゴは一九〇八年ベルギー国王の個人所有地から国家的所有に移され、一九六〇年に独立した。



ベルギー憲法はフランス革命の影響が大きい、独立時、英国が共和制を認めず、ドイツから王を迎えることとなります。王は君臨すれど統治せず、独立記念日は国王が議会で宣誓した日であり、憲法も「ベルギー国民は…」で始まる条文が多いなど斬新でした。日本人にとつても明治の知識人だけでなく、大正期に

は、吉野作造が労働運動の研究に赴くなど、ベルギーは「自由という面ではあこがれの場所」であつた。

ヨース准教授にはベルギーに関する有意義なお話をたくさんいただき、参加者には、ベルギーが一段と身近な国になったことと思います。

なお、近代史研究会は、会費などもなく、どなたでも事前の申し込み無しに自由に参加できます。お気軽にご参加ください。今後の日程は次のとおりです。開催の時間等については自由民権館（電話 831-3336）までお問い合わせください。

7月26日（土） （第38回研究会）	報告者：豊田満広 中岡慎太郎館 テーマ：（仮）土佐の戊辰戦争
9月20日（土） （第39回研究会）	報告者：岡村淳 記録映像作家 テーマ：人はなぜ移動するのか
11月1日（土） （特別研究会）	報告者：宮尾進 サンパウロ人文科学研究所 テーマ：（仮）ブラジル日系移民史
11月22日（土） （第40回研究会）	報告者：吉田文茂 テーマ：（仮）透徹した人道主義者岡崎精郎
1月10日（土） （第41回研究会）	報告者：浜口眞吾 県立美術館 テーマ：（仮）高知の映画史をめぐって
3月21日（土） （第42回研究会）	報告者：松岡信一 高知大学教授 テーマ：（仮）土佐自由民権運動研究の現状と課題

財団法人板垣会の歴史

公文 豪(高知近代史研究会)

板垣伯銅像記念碑

建設同志会の設立

板垣退助は、大正八年七月十六日午前八時半、東京芝愛宕下の邸で亡くなった。八十三歳だった。没後、高知を訪れた宮城県知事森正隆(旧自由党员)は、高知に板垣の顕彰施設が何一つなく、特に潮江新田の旧邸が荒廃していることに驚き、土佐人の「忘恩」を強く警告した。これも板垣退助の銅像建設を促す要因になったらしい。

大正九年三月十六日、安芸喜代香・弘田永清・大島更造・宇田友猪・谷流水・弘瀬重正・松尾富功・葛目成茂の八名が、高知公園にあった県教育会内で、記念碑建設について協議した。さらに六月から七月にかけて会合を重ね、『板垣伯銅像記念碑建設同志会』を結成。山本忠秀等理事十六名を置き、理事長に県教育会長の安芸喜代香を選任する。



戦前の銅像



昭和23年から発行された五十銭札

建設同志会は、同十年四月二日に寄付金募集の許可を得、監事に森下高茂等五名、専務理事に弘田永清、池田永馬を推挙。事務所を高知市役所内に設け、県下二万円を目標とする募金活動を開始した。ところが十二月十日に安芸理事長が急逝。あらためて会長に知事安倍亀彦、副会長に高知市長松尾富功祿を選任し、銅像建設資金も三万二千元以上と増額決定した。

この後、高知市会が市費二千元、土佐郡会が郡費九百円の寄付を議決したほか、県下各市町村で賛同拠出者が相次いだ。東京大相撲協会も、板垣生前の相

撲振興の恩顧に報いるため銅像建設募金に賛同。浜口雄幸・坂本素魯哉・大石大・国沢新兵衛・竹内明太郎・水野吉太郎の六代議士を中心に板垣伯記念角力後援会が結成されると、同十二年二月国技館で寄付興行を行い、純益二万五千七百円を寄付した。これにより銅像建設資金は目標額を超えて集まった。

大正十二年十二月五日、追手門内を埋める二万余の会衆が見守る中、板垣退助の銅像は孫の守正の手で除幕された。銅像制作は宿毛出身の塑像家本山白雲、標名の揮毫は西園寺公望、工事監督は島崎猪十馬がつとめた。本山白雲の傑作と評された銅像の高さは、台座をふくめて二十二尺七寸。総建設費は二万五千六百四十六円九十九銭だった。

翌十三年、建設同志会では中島町高野寺門前に「生誕地碑」、銅像横に「銅像

由来碑」、丸山台に「外遊帰郷歓迎地碑」、潮江新田に「旧邸跡碑」を建立。さらに中城直正執筆・宇田友猪校閲『板垣退助君略伝』を出版した。次いで、剰余金三千円を資産として財団法人設立を申請。大正十四年四月十七日許可され、「財団法人板垣伯銅像記念碑建設同志会」が設立をみた。

財団法人板垣伯銅像記念碑建設同志会の活動

財団法人(登記は大正十四年五月二十八日)の目的は、「故伯爵板垣退助先生の高知県に在る銅像及記念碑の保管手入並記念の祭典集会講演を為す等永く追慕の事に当る」ことにあった。最初の理事は、松尾富功祿・谷流水・島崎猪十馬・池田永馬・弘田永清・久万裕・上岡清忠・別府寅太郎・石黒猛太郎の九名で、初代理事長に松尾富功祿が就任した。その後の理事には、西本直太郎・宮地元治・溝淵幸馬・中島鹿吉・川淵治馬・水野吉太郎・大野勇などがいる。多くが青年時代に自由民権運動に参加して板垣の薫陶を受けた人々であった。

建設同志会は、毎年四月六日に岐阜遭難記念会、七月十六日に法要を行ったほか、『立国の大本』の復刊、板垣の論著『岐阜中教院に於ける遭難時の演説』『後藤象二郎伯追悼演説』『西郷南州と予との関係』『板垣伯逝去当時を偲ぶ』(いずれも小冊子)などの出版に取り組んだ。



板垣会館と板垣会の成立

一方、「板垣会」は、板垣会館建設後援会を母体として生まれた。

板垣会館の建築は、昭和八年の板垣第十五周忌法要の際、高野寺住職谷信讃が「敷地を提供し相応の費用及び維持費を負担する」という声をあげたことにはじまる。

同年二月十九日、横山又吉・溝渕幸馬・山本正心ら五十八名は高野寺に集会し、板垣会館建設後援会を結成。県下有志からの寄付に加えて野村茂久馬・横綱玉錦・頭山満・胎中楠右衛門らの骨折りで再び国技館で寄付相撲が行われ、約三万三千七百円の建築資金を得た。

高野寺境内(板垣の生誕地)に建てられた外観が洋風の板垣会館は、二階に陳列室・集談室・食堂・



板垣会館

事務室、二階に七十三坪の講堂や和室を備えていた。

昭和十二年四月六日の落成式には、五十九年ぶりに来高した頭山満が出席して話題となった。頭山は、前日に潮江山の楠瀬喜多の墓に詣でて、過ぎし日の民権ばあさんとの交流を偲んだ(この時の記念写真が、現在、自由民権記念館に寄託されている)。翌七日、頭山も出席して会館講堂で憲政功労者の慰霊祭が行われ、島本仲道・坂本直寛・北川貞彦ら立志社員が悪戦苦闘を回想した。

会館建設が終わると、役割を終えて建設後援会は解消。十二年八月、その後身として板垣会が結成された。顧問その他は前組織そのままだった。常務理事には池田永馬が就任して会を代表した。当時、池田は財団法人板垣伯銅像記念碑建設同志会の代表でもあり、戦前における板垣退助顕彰活動の中心人物と言ってもよかった。板垣会は、『憲政と土佐』や『板垣退助先生銅像供出録』

などを出版している。

財団法人板垣会へ衣替え

昭和十八年二月二十五日、「財団法人板垣伯銅像記念碑建設同

志会」は、名称を「財団法人板垣伯銅像保存会」へ変更する。

ところが戦局はますます悪化。各地の銅像は軍需物資として供出されるようになった。板垣銅像も同じ運命をたどり、同年九月二日、四十余名が出席して壮行式典が執り行われる。当日は、祭主の財団法人板垣伯銅像保存会理事長の大野勇(高知市長)が祭文を朗読。高橋三郎知事は『壮行の辞』で、「今日茲に板垣伯の尊き英像再び現身と化し米英撃滅の第一線に立たんとするのであります」と述べた。銅像は九月十二日に解体を終えた。

財団法人板垣伯銅像保存会は、供出によって「銅像保管」という目的を失った。このため、敗戦間近の昭和二十年五月十日に板垣会と合併。名称を「財団法人板垣会」に変更し、目的も「本法人は故伯爵板垣退助先生の遺徳を顕彰し君国に寄与するを以て目的とす」と改めた。

現在に続く財団法人板垣会はこうして誕生したが、板垣会が事務所を置いていた板垣会館は、それから二ヶ月後の七月四日、無惨にも高知空襲で焼け落ちてしまった。

昭和二十二年十月十日、財団法人板垣会は戦時色を一掃し、新時代にふさわしく、目的も「板垣退助先生の遺徳を顕彰し民主的文化国家の建設に寄与するを目的とす」と改めた。その後、さらに「故板垣退助先生の遺徳を顕彰し、自由民権

思想の拡充徹底に努め民主的文化国家の実現に寄与することを以て目的とする」と改めて現在に至っている。

戦後の板垣会とその役割

昭和二十年代以降に板垣会理事をつとめた人々に、福永久寿衛・安芸義清・谷信讃・野村茂久馬・長尾正元・岡村三省・中島龍吉・岩川真澄・里見義裕・橋詰延寿・吉松清・寺尾豊・平尾道雄・竹内三賀男・中島内記・吉村真二等がいる。戦後の高知を代表する顔ぶれと言つてよいだろう。

板垣退助は、明治の人々にとって自由の神様であり、土佐人にとっては維新の元勳として郷土の誇りであった。戦前、その名声は坂本龍馬をも凌いだ。戦後になると、昭和三十一年の銅像再建除幕式の参列者が僅か五十名だったように、人々の関心は薄れてしまった。しかし、これまで二度も紙幣の肖像に描かれ、歴史教科書に写真が掲載されるなど、高知が生んだ偉人としての全国的知名度は抜群である。「板垣死すとも自由は死せず」の言葉とともに、憲政史に残る板垣の功績も不朽であろう。その顕彰団体として八十三年の歴史をもつ財団法人板垣会の果たすべき役割は、まだまだ大きいと言わねばならない。

民権史料を読む会 に参加して

楨村 節雄

私は、先人の書き残した文書・資料等を解説書なしに自由に読める知識を身に付けたいと、常々思っていました。

昨年の、自由民権記念館友の会総会後の席で、市史編さん室が自由民権記念館に移転してきたことに伴い、たかじょう庁舎で行われていた「古文書の会」を改称して、自由民権記念館所蔵の「民権史料を読む会」を開催している事をお聞きし、六十の手習いならぬ古稀の手習いを決意して、参加させて頂きました。

参加している皆さんは、年令も若くベテランの方々ばかりでした。会の進行は、筒井室長さんがリーダーを勤め、上田先生を顧問に迎えて、楽しい雰囲気の中で進められていました。続けられるかどうか心配しましたが、初心者を受け入れてくださる雰囲気を感じ、出席を重ねることに、興味も広がり、感動もありました。読解力はまだまだですが、楽しく参加が出来た二年になりました。

現在は、細川家資料の中の書簡類を読んでいます。母親から息子(当主・義昌)宛の手紙が強く印象に残りました。母親の梶さんは、土佐藩の右筆を勤めていたと言われており(細川家資料目録)達筆で、しかも男性が書いた様な筆勢のある文字で、男勝りの気性を感じました。

土佐藩兵・御親兵として、活躍している息子に出した手紙には、健康を気遣いしつかり勤務するよう激励しています。また、

休暇で帰省することを、心待ちする母親の心情が切々と記されています。弟をはじめ親戚などの消息、国許の暮らし等の細かな近況報告もしています。息子が送ってくれた、お金(札)を預かっておこうと思いい、箱に入れて保管していて箱を開けると、交換期日のあるお金が出てきて、期日が過ぎており使えなくなつてた事を残念がっています。また、収穫した米の相場・換金率等国許の経済動向なども詳しく書き送っており、明治初期の世相、元郷土で大地主の裕福な生活が読み取れます。

文面は、話し言葉で書かれ、現在聞く事の無くなった方言も頻繁に使用されており、女筆特有の用字・用語も使われていて、知識不足の身では、『くずし字用例辞典』等を片手に、指導を受けながら、解説に悪戦苦闘しています。

今後、時間の許す限り参加させて頂き、牛歩ながら先人の書き残した文書等が、読める様になりたいと思っています。

(自由民権記念館友の会員)

原典を読むこと＝著者と面会できる喜び

読書会の楽しみ

窪田充治

一九九二年春、定年退職して、私も自由民権記念館の行事や、友の会の活動に参加する時間がふえ、読書会にも出られるようになりました。その頃は、友の会活動と並行して、「兆民忌実行委員会」の活動が活発で、中江兆民の最後の傑作であり当時のベストセラーとなった『二年有半』を読む会をやつて

いました。岡林清水先生の名解説と的確な現代語訳にわくわくしながら聴き惚れ、兆民の人間性や社会観、哲学や政治理念に触れることができました。

その後も原典を読む活動は続き、『植木枝盛日記』を読む会が始まりました。私は『植木枝盛日記』を購入していませんでしたが、毎回原文をコピーして下さり、学芸員の方が関係資料を提供してくれるし、充実した学習になり、枝盛が死ぬ直前まで毎日欠かさず書き続けた日記が自由民権運動の歴史的事実を提示してくれていることに感動しました。

一九九八年の秋から私たちが友の会幹事会が運営に当たることになり、テキストに選んだのが外崎光広著『植木枝盛の生涯』でした。参加者が大勢きてくれたら良いが、どうなることか心配していたら、なんと十数名が集まり感激でした。その原因は高知女子大学の森岡和子先生が、講義の中で枝盛の『育幼論』を教材にしておられた関係で、教子である元保母さん達を大勢引き連れて来て下さったからでした。楽しい読書会となり、心から感謝した次第です。

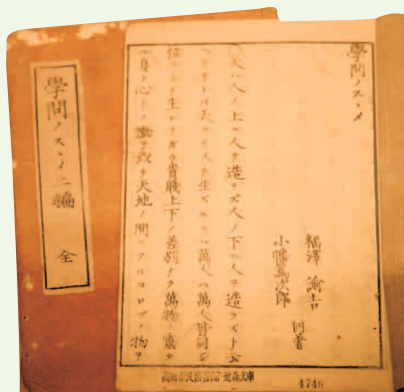
二〇〇二年の秋には「自由民権運動 福島・喜多方事件百二十周年記念の集い」に友の会から十四名が参加することになり、読書会でも「土佐と結ぶ三春の自由民権運動」をテキストにして福島ツアーの参加者全員が事前学習しました。

二〇〇三年からは福沢諭吉の『学問ノススメ』を毎月一回、高知大学の松岡億先生の講義つきで読破しました。あまりにも有名な本ですが、原典を読破した人は少ないのではないのでしょうか。予習は必要なし、その場で輪読、その上に松岡先生の解説という進め方

が適切で、毎回五名ないし十名という参加者をえて成功したと思います。福沢は江戸末期の幕藩政治に幻滅し、明治初期の政府にも同調できず、支配者には期待せず、賢き官僚と健全な国民を育成することが国を救うことになるとし、「実学」の必要を説き、『学問ノススメ』を書いたと解されます。

その後の読書会では、二〇〇四年秋の「秩父事件百二十周年記念集会」参加の事前学習のために、「秩父事件―圧制ヲ変ジテ自由ノ世界ヲ―」を取り上げ、次に岩波文庫の家永三郎編『植木枝盛選集』も読破し、現在は桑原武夫・島田虔次訳の中江兆民『三酔人経綸問答』に取り組んでいるところです。参加者たちは「難しくて、原典を読むことによって、民権家の迫力を直接感じとることができ、その思想や理念を深く理解することができ」と感想を述べています。

(自由民権記念館友の会事務局長)



学問ノススメ

資料紹介

二〇〇七年度購入資料

近衛砲兵暴発録之画

小林清親

(一八七八年作)



一八七八(明治十一年)八月二十三日夜発生した近衛兵の反乱、竹橋事件を描いた錦絵。竹橋事件は、近衛砲兵大隊の兵卒数百名が、給料の減額や西南戦争の論功行賞への不満などを理由として反乱をおこした事件で、徴兵制下最初の兵士暴動である。背景には、比較的自由であったフランス式から統制を重視するプロシヤ式への軍制の移行や自由民権思想の影響があったとされている。

この画では、中央に宇都宮少佐、右空に深沢大尉が描かれている。反乱兵は制止するこの二人を殺害して決起したので、まさにその場面を描いたものである。反乱軍は山門二砲を曳き、兵営を脱出、赤坂飯皇居に向ったが、政府はすでにこの反乱を予知していたため、ただちに鎮圧され、首謀者を含め五十五名の兵士が死刑となる苛酷な処分が下された。

この事件は、その後日本の軍隊が絶対服従を基軸とする組織となっていく一つの契機ともなった。

作者の小林清親(一八四七～一九一五)は、版画家、風刺漫画家として活躍した人物。文明開化期の風景や風俗、事件を描いて大衆的人気を博した。写真が未発達な時期に、変化する東京の様子や社会的事件の模様を伝えるものとして、錦絵は広く愛好された。

当館では、自由民権、帝国議会関係を中心に明治期の錦絵の収集を進めており、今後の展示に活かしていくこととしている。

民権家人物録



さきやま ひびや 衛 崎山比佐衛 (1875~1941)

一八七五(明治八年)十月二十九日、長岡郡吉延村(本山町)で崎山常吾の長男として出生。家業を手伝いながら夜学に通う。少年時代は自由民権運動の演説華やかなりし頃で、森下高茂のもとで少年ながら演説も行った。

一九〇〇(明治二十三年)、勉学を志して東京行を決行するが、失意のうちに帰村。友人から武市安哉を紹介してもらい、武市の北海道開拓計画に賛同し、一八九三(明治二十六年)六月二十日北海道へ向け出発する。武市の創業した「聖園」で開拓事業に勤しみ、仲間には、「三大事件建白運動」の時に同郷の有志とともに上京した前田駒次、学生であったが、その渦中に身を投じていた野口芳太郎、また佐藤精郎やその後入植してきた小笠原尚衛、吉村吉太郎等「自由党」関係者が多く、自由民権村といった風情であった。同年十月七日には武市の影響でキリスト教の洗礼を受ける。

一八九七年、北海道をはなれると仙台の東北学院に入学、ついで一九〇九年東京の青山学院に入学。在学中、苦学生が学費を稼げ

るようにと学生労働会を設立するも折からの不況で、学校卒業者の就職難に直面する。その打開策として海外進出の構想を打ち出す。

一九〇四(大正三年)二月から十六年二月まで南北アメリカ横断の視察旅行を行い、『南北両米踏破三萬哩』を著し、『南米の沃野は茫々として空しく捨てられ堅忍にして敏捷なる我民族の来るのを待つて居る。』と移民先として南米へ照準をさだめた。

帰国後、一九一八年海外植民教育会および海外植民学校を創設。卒業生の海外移住を奨励し、彼らを南米植民開拓の中堅層として送り出した。さらに、海外移住の基本的な知識を広めるために、機関紙「植民」を発行し、具体的な渡航の方法や植民地先の生活などを紙面に載せ、情報を提供した。また、山梨県八ヶ岳に分校の設立を計画し、県内の高等小学校で講演会なども開催。

一九二七(昭和二年)南米大陸二度目の視察旅行を決行する。「アマゾン」の気候風土は決して日本人の移植に不適當ではなく、日本民族はアマゾンに於て繁栄し得る。否、世界の諸民族中ひとり日本人のみがアマゾンに大なる征服の先駆者となることのできる」と、崎山にとってアマゾンは「約束の地」であった。

一九三二年一家を挙げてアマゾン流域のマウエスに入植。現地でマウエス分校設立を構想するが、途半ばで「アマゾン日本植民の父」は、一九四二(昭和十七年)七月二十四日、没する。

常設展示 Q&A

- 4 -



Q 立志社の立志の意味を教えてください。
また、立志学舎は何歳ぐらいの学生が学んでいましたか。その中に女性はいましたか。

A 立志とは志を立てる事、目標を定めてそれを成し遂げようとする事です。由来は「天はみずから助くものを助く」という諺で始まる英国のサミュエル・スマイルズの『西国立志編』、原名＝自助論(セルフ・ヘルプ)に拠ります。

立志学舎には、現在の小学生から大学院生ぐらいの幅広い年齢層の学生が学んでいました。ちなみに入学時の年齢をあげますと、坂本南海男24歳、大石正巳19歳、西原清東15歳、島崎猪十郎10歳、宮地茂春9歳です。立志学舎には女性が在籍した形跡はありません。入学を希望する女性がいなかったというより、入学を許さなかったためだろうと推測されます。



★民権家 水野龍興関係資料取材

・NHK「そのとき歴史が動いた 移民は共存共栄の事業なりーブラジル移民百年」
(八月十八日放送)



★自由民権記念館を使った取材やロケなど
(三月から六月にかけて)

映画「太陽と月 日本国憲法の誕生」

★植木枝盛の憲法草案と日本国憲法の関係を、立川志らく師匠のナビゲートで描くドキュメンタリー映画。民権ホールで落語会の口ケもおこないました。

最近の動きから

・高知放送「ふるさと」の記憶「はらたいたらのおらへん風土記」(四月二十日放送)

★民権研究家・外崎光広先生の思い出

★ボイストレーニング グループレッスン



「発声の会」代表の金澤博先生を迎えて、正しい発声を取得するための講習会が民権館で四月十一日に開催されました。主催は「うちミナ」チームネットワークで図書館の司書や博物館の学芸員、読み聞かせの会の会員たち二十七名が参加しました。

★二〇〇八年度放送大学「人間の探求」
―自由は土佐の山間より―



自由民権記念館を使った放送大学の集中講義が六月十四日から十五日にかけて開催されました。講師は高知大学教授の松岡信先生。パワーポイントを使用した講義と展示資料を前にしての解説によつ

★マキキ同窓会

て自由民権運動への理解を深める事ができました。

奥村多喜衛とハワイ日系人移民展(平成十二年度開催)実行委員会の後身、奥村多喜衛協会とマキキ聖城基督教会の主催で、同窓会を六月十五日にアトリウムで開催しました。マキキ聖城基督教会の黒田牧師夫妻や高知からの留学経験者らも駆けつけ、約二百名が料理や思い出の写真を持ち寄つて再会を喜び、親睦を深めました。



★板垣退助百二十六年祭

―堀川の花見と丸山台のおきやく―

板垣退助百二十六年目の記念の日を翌日に控えた平成二十年四月五日、自由民権記念館友の会と財団法人板垣会の共催で「堀川・丸山台 川巡り花見会」が開催されました。午前十時堀川のほとりに集合した三十名の参加者は三便に分かれて渡船で堀川を下り、丸山台に渡りました。

丸山台は、鏡川の河口付近にぽつかりと浮かぶ小島で、川の両岸から約二百メートルの位置にある無人島ですが、過去の記録をたどると歴史の様々な場面で登場します。自由民権運動とも縁が深く、この地で民権派や反民権派の懇親会などが何度も開かれています。板垣退助が岐阜で襲われたときは日本中が大騒ぎになりましたが、その快癒を祝うために民権派約千人が集まっていた



宴が開かれたのもこの時です。また、明治十六年八月二十九日板垣がヨーロッパから帰高したときには歓迎式典に五千余人余りが参加しています。会場となった丸山台付近には陸海を問わず、人と船であふれていたと当時の新聞に記録が残っています。丸山台はこのような歴史のある島でありながら、昭和南海地震による地盤沈下や台風被害で浸食され、消滅の危機に陥っていました。平成四年からの護岸工事を含む修復保全作業により現在の姿となっています。

今回の花見では堀川を下りながら満開の桜を楽しみ、丸山台に上陸しました。友の会の大島会長と、板垣会の小笠原さんの挨拶の後、丸山台や板垣会について公文豪氏の解説があり開宴。板垣退助と誕生日が同じというシンガーソングライターの松尾貴臣さんのミニコンサートや詩吟も飛び出すなど、終始和気藹々とした雰囲気でした。

参加者された皆さんからは「丸山台には一度来てみたかった。堀川の桜も美しいし、川風も本当に気持ちよかった!」せつかくの史跡を活かすためにも、ぜひまた開催してほしい!という声が多く聞かれました。

と き きと
時代の郷



自由のともしび

JIYU NO TOMOSHIBI

自由民権記念館だより vol.63

発行 2008(平成20)年7月1日 発行人 西田幸人

発行所 〒780-8010 高知市棧橋通4丁目14-3 TEL.088-831-3336 FAX.088-831-3306